

田中二郎・掛谷誠編

『ヒトの自然誌』

平凡社

1991年, 622ページ

児玉谷 史 朗*

本書は昨年3月京都大学を定年退官した伊谷純一郎氏(現アフリカ学会会長)の業績を記念する事業のひとつとして企画されたものである。本書はアフリカの狩猟採集民, 牧畜民, 農耕民を対象とする生態人類学研究成果を収める。同じ企画のひとつとして霊長類学の成果を集成した西田他編『サル文化誌』と姉妹編をなす。全部で27人の研究者が本書に寄稿しており, そのほとんどが京都大学の大学院で学んだ人々である。いずれもアフリカでの豊富なフィールドワークの経験をもった研究者であり, 伊谷氏の指導の下30年に及ぶ京都大学の生態人類学研究, アフリカ地域研究の層の厚さ, 規模の大きさにあらためて感心させられる。しかも27人のうち14人が1950年以降の生まれで, 若い研究者が着実に養成されてきていることを窺わせる。

私は生態人類学の門外漢であり, 以下は, アフリカ研究者ではあるが, 異なった専門の者という立場からの書評であることをあらかじめお断りしておく。したがって(生態)人類学の専門家であれば当然評価すべき, あるいは論及すべき点がこの書評では落ちているであろうことをご容赦いただきたい。

本書に収められた27本の論文は, I. 共存の原理, II. コミュニケーションの諸相, III. 農耕と牧畜の世界, IV. 病いと死の民俗, V. 人々の絆, VI. 変貌する社会の6つのテーマにまとめて編集されている。本来なら各論文について, 紹介と評論を行うべきであるが, 限られたスペースでこれだけの数の論文をすべて扱うことは不可能なので, ここでは本書について全体的に論評することにしたい。

*一橋大学社会学部

本書の意義のひとつは、著者たちの地道なフィールドワークにもとづいた長年の研究成果の上に立って、より醒めた目で人類学研究の視点やアフリカ地域研究の問題点を論じているところにあるだろう。その意味で本書は京都大学の生態人類学研究、アフリカ地域研究を振り返ってみたひとつの試みといえよう。本書の編者のひとりである田中二郎氏は1984年に生態人類学の成果を回顧して、個別の研究を全体的に見直し、比較検討することが必要な段階にさしかかっていると述べているが、本書はその重要なステップといえよう。

同時にあとがきで掛谷氏の言うように、本書は生態人類学の「転回を予兆する書」でもある。それはひとつにはこの30年の地道な研究の成果が蓄積されて、いわば成熟の段階に入ったことの当然の帰結として、この学問が新たな展開を示しつつあることを意味しているだろう。しかし評者が見るところ転回の契機となっている二つの点を指摘したい。

ひとつは新しい理論的関心や知識・視点をもった若い研究者たちの登場である。あとがきにいうように本書に収められた論稿は実に多様な内容をもっており、これらすべてが「生態人類学」の枠組みの中に収まりきるのかどうか戸惑いを感じる読者も多いに違いない。生態人類学は「人類社会進化史の再構成という視点にたつて、ひとの自然環境への適応、ないしヒトと自然とのかかわりあいを明らかにすることにより、人類社会の成立基盤を広義の生態学の立場から把えようとして出発した分野」(7ページ)であるとされる。しかし、例えば、本書の「Ⅱコミュニケーションの諸相」に収められた4つの論文の関心や方法、それが描き出す世界は、このような生態人類学の古典的なイメージとはずいぶん異なった印象を与える。そこには生態人類学の出発の時点にあったものとは異なった新しい理論的関心や視点を見ることができるといえる。もちろんある研究が生態人類学研究といえるのか否かというような議論は生産的ではなく、ここでそのような議論をするつもりはない。むしろあとがきで掛谷氏の言うように、この学問をつくってきた研究者たちは「『生態』というタームによって、

いわば『下部構造』の研究に自己限定することを…意図したのではな」く、「『生態』は文化をもったヒトの生存条件を探るための新たな切り口を求める立脚点であり、問題発見のための概念であった。」このような開かれたアプローチであったからこそ、新しい関心や視点をもった若い研究者をも包摂することができたのであろう。ひとつの学派を形成するような偉大な学者は時として、弟子を型にはめてしまうことがあり、そうなるとその学派の研究は新しい時代の変化に対応できなくなって急速に陳腐化するということがある。本書を見る限り、このような心配は無用であるといえよう。

生態人類学の転回の契機となるであろうもうひとつの点は生態人類学が研究対象としてきたアフリカの諸社会の急激な変貌である。元来生態人類学は、自然に強く依存して暮らす人々の社会を対象としてきたのであり、しろうとの言い方を許していただければ、アフリカの最も「奥地」、首都からの「遠隔地」に住む人々を調査してきた。いうまでもなくアフリカの諸社会は植民地化によって世界的な政治・経済体制に組み込まれ、独立以後の国民国家、国民経済の建設の努力のなかで大きく変容してきた。そのなかで生態人類学が対象としてきた社会は世界の政治・経済の影響や中央政府の政策の影響から比較的隔絶し、あるいはそれを受け入れずに伝統をよく保持してきたともいえる。しかしここでも近年急速に事情が変わりつつある。

本書が「変貌する社会」という章をわざわざ設けたのもこの間の事情を反映しているといえよう。この章に収められていない論文でも、安溪遊地氏の「再訪・ソングーラの物々交換市—『伝統』の今日的意味について」や竹内潔氏の「アカにおける社会的アイデンティティ—定住化集落の事例から」なども変貌の問題を扱っているといえる。カラハリ狩猟採集民サンの定住化の事例にあるように、遊動しつつ狩猟採集を行なうという狩猟採集民を狩猟採集民たらしめている生業形態、生活様式が政府の政策によって根本的な変更を迫られている場合もある。生態人類学が注意を集中してきた生業形態が大きく変化し、さらには生態人類学

が対象としてきた狩猟採集民が「民族の消滅」に直面するという事態さえ起こりつつある。

このような急激な変貌はそれらの民族の伝統にとって、それらを研究対象とする生態人類学にとって危機的状況といえる。それは「私たちの世界からはすでに失い去られた、まったく異質の文化と、そして一個の由緒ある民族の消滅につながる重大な出来事」であり、おのおのの民族が「由緒ある歴史を捨て去り、自らのアイデンティティをも喪失することになったとすれば、人類の古い遺産はつきつぎと消えてゆくことを意味する(597, 606ページ)。人類学者の手によってこれら諸民族の生活や社会や文化が記録されてきたことは各民族と人類全体にとって貴重な財産と言えよう。

しかしこのことは生態人類学が、その対象とする社会の伝統と同様に、もはや過去のものになったとか、有効性を失ったということの意味しない。いかに急激に変容しつつある社会であっても、一気にかつ全面的に伝統的な社会システムや価値観、原理を捨て去ってしまうことはありえない。たとえば、カラハリ・サンの定住化について大崎雅一氏が書いているように、一方で定住化以降盛んになった騎馬猟ではサンの伝統的な平等主義にもとづいた分配が行われなくなっているが、他方で平等主義の不文律に従う犬・槍猟を並存させることによって、サンは生計活動や規範の二重化をはかり、彼ら自身の文化と近代的な価値観を調和させている。また安溪遊地氏がソングーラの物々交換市について指摘しているように、ザイールの国民経済の破綻（それは現代の国際経済、アフリカの「近代国家」の問題と密接に関連している）という状況に対応して、経済の自律性を保とうとする緩衝装置としてバーター市が機能しており、「安易に『伝統』と『現代』を対立するものと考えことはできない」のである。このように「伝統」が現代的状況のなかで再生する、あるいは再生産されるとすれば、生態人類学研究がこれまで地道なフィールドワークの積み重ねのなかで蓄積してきた方法や情報は今後も重要な役割を果たすであろう。

自然に依存する度合いの大きい人々を生態人類

学は対象としてきたが、この自然環境自体が近年の開発に伴う政治・経済・技術的变化のなかで急速に変化しつつある。彼らは自然に依存する度合いが強かっただけに自然環境の変化によって最も大きな影響を受ける。また彼らは近代国家や国民経済のシステムのなかで政治的にも経済的にも弱者である場合が多いだけに、開発から受ける影響は大きく、自立的に変化に対応するというより、変化に押し流されてしまいがちである。もちろん開発という大きな流れ自体を拒否することはもはや不可能といつてよい。むしろこのような状況においてこれら少数民族の人々の伝統やアイデンティティを保持し、環境を保護しつつ、彼らの立場に立った地域開発を進めることが重要であろう。それにはこれまでのような中央政府の中央集権的な上からの開発の押し付けや、援助国による一方的な技術や物の移転というやり方を改めると同時に、各民族、地域の生業、伝統、社会を理解したうえで、彼らの自主性と参加を保障するような開発のし方が必要になる。その際人類学と人類学者の果たせる役割は大きい。田中二郎氏が本書の「変貌するアフリカと狩猟採集民」で述べているように、「一つの社会に長年住みこんで交わり、人々の生活や思考に他の人間以上に深い関わりをもっている」人類学者が、具体的に地域開発計画を提案し、関与することも考えられるであろう。人類学者が開発計画に直接関与することの是非については議論のあるところであろうが、開発の問題自体を避けることはもはやできないであろう。